

続

徒然
つれづれ

曖昧模糊の時代

桑野 巍

「冬場はプロ野球の試合がないのでちょっと寂しいですよ」。アラフォー世代のプロ野球ファンの一人が侘し^{わび}そうにこう言った。選手の移籍情報も面白くなく、キャンプやオープン戦もそれほど興味が湧かないらしいが「それにしても選手の契約更改の新聞記事を見るが全般に年俸が高過ぎる」と言い、妬み根性を発揮する。野球技術も大したことはないし、努力も人並み以下、闘争心も薄いような選手に球団経営者はなぜ億単位の年俸を支払うのか理解できない—と言いプロ選手の強欲主義を厳しく批判した。

プロ野球の場合、勝者や活躍した選手に高額年俸を支払うのが当然視されているらしいが、球団経営側の甘やかしが目につく。とはいえ人気商売ということもあるから選手側に欲を捨てて高潔になれというのも土台無理な話だが、経営側、選手側両者には「このままでいいのか」と言いたい。お金の話とくに他人の懐^{ふところ}をのぞき見するのは得意としないが、本場米国の選手の高報酬も異常で、バブル現象がまだ続いており危^{あや}かしい。選手の銭闘とファンの財布の締め方緩め方がこの先どう展開するのか、じっくり見ていきたい。

同じ高額億単位の動かす自治体の予算編成担当者はこの期に至って悩みの雲の中にいるようだ。プロ野球選手と違って自身の給与で悩むのではなく、自治体の税収などの減少が如何とも仕難いからだ。担当者はプロ選手の年俸が羨ましいとは言わなかったが、住民のニーズ増に加え景況悪化の長期化が気懸りで「予算編成担当から逃げ出したいくらい」と正直に心情を吐露していた。

若いころから数字が苦手だったせい^{せいか}恥を忍んで「年間予算も決算もよくわからない」と泣き言をいっただら、当時の大蔵官僚が「それは困ります」と言って予算の概要を説明してくれたことがあった。少しだけ理解できたので、教えてもらった礼を述べたら、彼は大蔵省（現財務省）主計局の予算編成の取組姿勢から説明してくれた。「僕たち主計局員は国の予算を編成するという使命感をもち、責任感をもち、情熱ももっていた。自惚れ、思い上がりは禁物でエリー

ト意識を自ら戒めています」と意外に素直だった。

そこにはいつの時代からか「予算編成担当執務十戒」が言い伝えられていた。それは①威張っちゃいけない（相手のポストに敬礼だ、心しよう）②怒っちゃいけない（相手の立場を理解しよう）③甘くなっちゃいけない（相手の要求を見極めよう）④上を向っちゃいけない（相手を説得しよう）⑤辛くなっちゃいけない（査定はスジを通そう）⑥まるく入れちゃいけない（査定は積み上げよう）⑦独断専行しちゃいけない（横の連絡、上司の決裁注意しよう）⑧ルーズにしちゃいけない（念には念を入れ整理しよう）⑨嫌われちゃいけない（身を慎もう）⑩遅くなっちゃいけない（仕事は期日以内、時間以内、工夫しよう）—というもので、いまでもこの十戒は生きていると聞いた。

「でも」といって天の邪鬼ぶりを発揮し「このエリートたちが編成した予算がどう執行されているのか、各省庁の事業を主計局員は綿密に追跡調査しているの」と聞いたところ、彼は「決算というところで出てくるので…」と答えただけで、何だか腑^{はら}に落ちなかった。いまや国の予算規模は億兆円単位で一般消費者の持つお金のものさしは通用せず、予算審議もどこか遠くの方でピントはずれの質疑が行われている感じで、国民的な興味につながってこないのは残念だ。本来国民みんなの身近な問題やその解決策が予算の中に含まれているというのにである。

世は道徳なき金融大乱、経済無力、政治脱力の時代。住民はこれらに翻弄され暗澹とするばかり、失業や収入減の不安から抜け出せないでいる。先人が言うように「指導者に道徳を求めるのは八百屋で魚を求めるが如し」なのだろうか。道徳を含めて経済的威信が地に落ちた超大国の責任は大きいと思うが、その対応策と回復力を見ながら曖昧模糊の時代が通り過ぎるのを待つことにしよう。そこで思い出すのは読み人知らずの「天に春、地に冬けわし自治の道」という一句である。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）